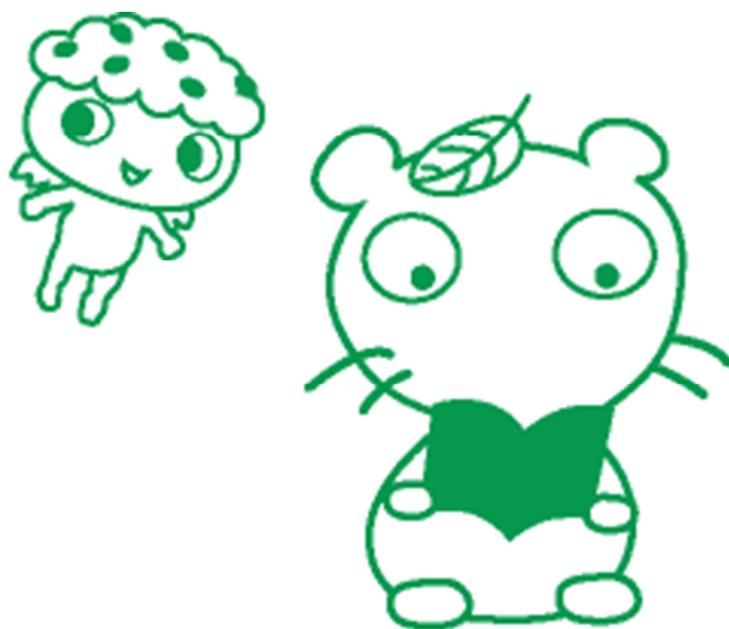


第二十一回 小中学生

ふるさとの詩

入賞作品集



羽生市

第二十一回 小中学生「ふるさとの詩」 入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 歌舞伎 私のちよう戦

萩原実和子

羽生東小学校

五年

1

宮澤章二賞 ぼくの宝もの

矢吹 優

羽生南小学校

六年

2

優秀賞 思い出の小学校

久保田朱莉

羽生東小学校

二年

3

通学路

澤田 百葉

須影小学校

六年

4

はじめてのキャッチャー

中島 理仁

新郷第一小学校

三年

5

奨励賞 母ちゃんの手伝い

梶原 莉咲

羽生南小学校

六年

6

おじいちゃんうどん作り

栗原大生志

羽生東小学校

五年

7

私の母校

佐久間翔子

羽生東小学校

五年

8

きぼうの「苗」

中村 文音

手子林小学校

二年

9

ぼくのたからもの

澤 蒼人

羽生東小学校

二年

10

その他の良い作品

11

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 未来への手紙

藤倉 日莉

南中学校

一年

12

宮澤章二賞 ありがとうの音色

濱野 颯介

東中学校

三年

13

優秀賞 新しい通学路

佐藤 郁仁

南中学校

一年

14

絵の中の私

長久保圭子

南中学校

一年

15

私は走る

蓮見友里乃

東中学校

二年

16

奨励賞 羽生の四季と剣

大谷 遥香

南中学校

三年

17

夏野菜

小澤 うた

東中学校

三年

18

夏の日差しと獅子舞の祈り

小野澤柊弥

東中学校

一年

19

送り盆

柏瀬 百花

西中学校

三年

20

皆が集う風の公園

藤井 倅太

南中学校

一年

21

その他の良い作品

22

◎小学生の部

太田玉茗賞

歌舞伎 私のちよう戦

羽生東小学校 五年

萩原 実和子

ぼん、ぼん、ぼん お化粧が始まった

「動かないで」とお母さん

あつという間に時間が過ぎていく

「終わったよ」とお母さん

着物をはおり 帯を巻く

刀を差して げたをはく

最後に心を整える

カン、カン、カン ぶ台に行く合図

拍子木が「がんばって」と応援しているみた

い

ざわざわしていた客席もしんと静まり返った

さあ、本番だ

番傘を持ち花道を歩く

カッン、カッン、カッン げたの音がぶ台に
鳴りひびく

マイクの前に立ち 大きく息を吸いこんだ

何度も練習した台詞

緊張したけれど大きな声で言い切った

仲間と息を合わせ 最後の大見得が決まる

パチパチパチ 大きな拍手とお客さんの笑顔

最初はとても心配だった

長い台詞 難しい昔の言葉

傘の使い方 げたの歩き方 たくさんの練習

が必要だった

終わってみると心からやってよかったと思え

る

「すごかったよ、感動したよ」と言われてと

てもうれしかった

仲間との練習も やりきった本番も 楽しか

った

もつともつとたくさんの人に伝えたい 歌舞

伎のみりよく

もっと練習をして もっと上手に演じたい

私のちよう戦は 始まったばかりだ

宮澤章二賞

ぼくの宝もの

羽生南小学校 六年

矢吹 優

キーパーグローブが

ぼくの宝もの

お父さんが買ってくれた

あこがれの選手と同じグローブ

手にはめた日

心がふるえた

その日から毎日一緒

練習の日も

試合の日も

晴れの日も

雨の日も

ぼくとゴールを守ってくれている

練習の後は

風呂で手入れをするのが日課
そつとよこれをおとして

今日のつかれを一緒にながす

お父さんが言った

「道具は大事にしるよ」って

その言葉を思い出しながら

グローブには

たくさん思い出がしみこんでいる

止めたシュートの重みも

悔しくて流したなみだも

勝って仲間としたハイタッチも

泥だらけだって

やぶれていたって

このグローブが世界で一番かっこいい

だって

ぼくだけの夢と努力がつまっているから

今日も心の中で言う

「たのむぞ相棒」

そしてグローブは何も言わず

ぼくの手をしっかりと包んでくれる

優秀賞

思い出の小学校

羽生東小学校 二年

久保田 朱莉

一年生のときのクラスは九人だけで、男の子も女の子も、みんななかよしだった。

ふたつある校庭にも、虫がいっぱいいる森も、大きなプールも、広い教しつも、やさしい先生も、大すぎだった。

でも、一年間しかかよえなかった。とうとうするから、とおくの小学校に行かないといけない。

お姉ちゃん、お父さん、おじいちゃんと同じ小学校をそつぎようしたかった。

三月のさいごの日、学校におわかれのあいさつにいった。

先生たちがまっついていてくれて、たくさんお話をした。

うれしかったけど、かえりみちはとてもかな

しい気持ちになつて、なみだがこぼれた。思い出いっぱいの小学校がなくなってしまう。

わたしは、四月からバスで新しい小学校にかよっている。

二年生は七十六人もいる。

おともだちがたくさんできた。

おにごっこも、ドッチビーも、みんなでやるととてもたのしい。

いろいろな先生がいて、休み時間にいっしょにあそんでくれる。

こまったときは、すぐにたすけてくれる。

教しつはせまくなつたけれど、せきがえもたくさんあつて、いつもワクワクドキドキする。

さいしょははじめての学校でふあんだった。でも、新しいことをいっばい学んだ。

だんだんと学校に行くことがたのしみになつていった。

今では、大すぎな小学校になった。

わたしには、思い出の小学校がふたつある。なんだかちよつぱり、とくべつでうれしい。

通学路

須影小学校 六年

澤田 百葉

小学校に通う道

通学路には田んぼがある

希望と不安に包まれる春

田んぼに水が張られると

一面が空を映す巨大な鏡になる

青空や流れる雲 夕焼けのグラデーション

それは神秘的で美しい

「大丈夫」と私を包みこんでくれた

新しいクラスに慣れ

仲間と活動をスタートする初夏

田植えを終えた小さな苗が力強く育つ

あざやかな緑のじゅうたん

風にゆれるいなほの音色

心地よい音色が「がんばれ」

と私の背中をそっと押してくれた

暑い夏いねがぐんぐん背だけを伸ばす

濃い緑色に成長していく

田んぼの中からは

カエル バッタ トンボ 様々な生き物

「力強く生きて」と教えてくれた

私は仲間と協力してぐんぐん力をつける

運動会 音楽会 実りの秋

いなほは黄金色に輝く

風にゆれる姿はまるで波打つ海

大地からの恵み実った喜びを感じる

私も仲間とやりとげた達成感

「やったね」と喜びを分かち合う

まとめの冬

収穫を終え静けさに包まれた田んぼ

水は抜かれ土がみえる

霜が降りた田んぼ 雪が積もった田んぼ

すべてを終えまた始まる春を静かに待つ

「力をたくわえまた始まる春を待とう」

そう言っている様だ

美しい季節の移り変わりを感じ

成長を支えてくれた私の通学路

感謝して歩く残された時間

私のかげがえのない自然に恵まれた通学路

はじめてのキャッチャー

新郷第一小学校 三年

中島 理仁

小さいころから、ぼくの遊び場はグラウンドだった

ぼくのお姉ちゃんもお兄ちゃんも野球をやっていたからだ

グラウンドの空いている場所で、友だちと遊んだり、ボール投げをしていた

ぼくも野球がやりたくて、一年生になったらすぐに入だんした

早くし合に出たくて、一生けんめい練習したやとと、し合に出してもらえるようになった

けど、なかなか結果を出せなくて、くやしくて泣いた

ぼくはキャッチャーがやりたくてサントさんにもらったキャッチャーミットで

キャッチングの練習をがんばったある日の練習し合

「キャッチャーやってみるか？」

かんとくに言われて、ぼくはうなずいた
本当はちよつとドキドキした

キャッチャーミットはぶあつくて大きい

マスクをつけたらまわりがぼやけた

夏の野球のし合

キャッチャーのぼう具をつけたら、人一倍

あついけど、ぼくは一球一球集中していた

あつさも感じなかった

ぼくが止めたボールの向こうに、ピッチャー

のえ顔が見えたんだ

「ナイスキャッチー！」だれかが言ってくれた

それだけで、ちよつと自信が出た

ランナーがとうるいした

オレの見せ場だ！

サイドを守る仲間のグローブへ

仲間を信じておもいつき投げた

とうるいしたランナーをアウトにすることが

できたんだ

すぐくうれしくて、仕方なかった

また明日もこの場所に立ちたい

キャッチャーってかっこいい

奨励賞

母ちゃんの手伝い

羽生南小学校 六年

梶原 莉咲

「さあ、始めますか。」

このかけ声を合図に母ちゃんの夕飯作りが始まる

仕事が忙しい母ちゃんは夕飯を食べ終わった後に翌日の夕飯を作るのだ

ぼくは

一緒に台所に立ち

「何をすればいい。」と声をかける

「鍋に水を入れて火にかけて。」

「きゅうりを洗って三等分に切って。」

「フライパンに油をひいて温まったらこの野菜を入れて。」

母ちゃんから次から次へと指示が飛ぶ

毎日手伝いしていると

包丁の使い方や野菜の切り方

フライパンに入れた野菜の炒め方

みそ汁の味付けなど

少しずつ上手になっていく

ぼくの手伝いは

仕事と家事を頑張る母ちゃんの

助けになっているかな

これからもできることをいっぱい増やして

母ちゃんのため

そして未来の自分のために

なっていくといいな

おじいちゃんのうどん作り

羽生東小学校 五年

栗原 大生志

おじいちゃんはいつも

大切なことやうれしいことがあると
うどんをうつ

ぼくはそれを楽しみに待つ

こしがあつて もっちりとして

ほっぺたがおちるほど おいしい

この夏もおぼんにうどんをうった

「大生志うどんふむの手伝つてくれ」

おじいちゃんは ぼくにそう言った

「ちゃんとできるかな」

ぼくはそう思った

母屋の裏の小屋に行くと

おじいちゃんがうどんの生地をこねていた

丸くした生地にビニールをのせると

「かかとに力をいれてふんで」
と言った

ぼくは生地におそるおそる足をのせ

ぼくはかかとに力をこめて

ドスン ドスン ドスン ドスン

うどんにこしがでるように

生地をふみしめた

のぼした生地を包丁で切り

お父さんが かまでゆでる

「たいし 食べるか」

ゆでたうどんを二本とると

水で冷やして ぼくにくれた

つるつ つるつ つるつ

うどんが口に入っていく

ゆでたては別格だ

このおいしいうどんを

いつか ぼくも 作ってみたい

私の母校

羽生東小学校 五年

佐久間 翔子

もしも私が小学校を卒業して

あなたの母校はと聞かれたら

私は村君小学校と答える

小さいけれど 全校児童 みんな友達

スカイスポーツ公園での仲良しハイキング

校庭いっぱいひびきわたる応えん

みんなで協力し合った運動会

収穫した米での飯ごうすいはん

しぶきをあびながら利根川をくだる

ボート体験

利根川の土手の上で風をきって走る

持久走大会

「カムバックサーモン」とさけんだ

さけの放流

思い出とともに一五一年の歴史をとじた

あなたの母校はと聞かれたら

私は羽生東小学校と答える

不安と期待でむかえた始業式

スクールバスに乗っての通学

緑深く広びろした校庭や校舎がまぶしい

ドキドキしながら教室に入ると

新しい友達と先生が笑顔でむかえてくれた

そして四ヶ月

私は毎日楽しく学校に通い学んでいる

友達ともたくさんおしゃべりし遊んでいる

私には二つの母校ができた

村君小での四年間

たくさんの思い出を作った

かけがえのない四年間だった

羽生東小でのこれから二年間

どんな二年間になるのだろう

先生や友達と一緒に

私らしく一歩ずつきずきあげていこう

きぼうの「苗」

手子林小学校 二年

中村 文音

青い空の下 いざ、やるぞ!!

「キラキラ光る水面」と

「ぬかるんだ土」

ツヤツヤとかがやいているみどりの苗

そう、今日は 「田うえ」の日

一つ一つ ていねいに

お米の苗をうえていく

ぬかるんだ田んぼに 足をとられ

「あっ」と思ったら、おしりに ドロ

つめたい水と ドロンコのズボン

「ゲコゲコゲコ」

「ピピピッピ」

「グワグワグワ」 「ケーン」

「ジョボジョボジョボ」

「サーッ」

わたしの耳にきこえてくる 自ぜんの音

一つ一つ ていねいに みんなで苗を
うえていく…。

「あっオタマジヤクシ」

「おっ、こつちにはヤゴ」

「ホウネンエビもいるよ!!」

田んぼの中には、わたしたちのほかにも
たくさん生きものが すんでいる

『今年も 大きく そだつてね!!』

わたしは、田んぼに「ねがい」も うえる

「サーッ」

風にゆれるみどりのじゅうたん

水面にうつる 青い大空

どこまでもつづく 広い広い 田んぼ

心にきざむ うつくしさ

みどりの海は きぼうの「苗」

未来をはぐくむ 土地にかこまれ

わたしも 大きく そだつていく…。

ぼくのたからもの

羽生東小学校 二年

澤 蒼人

ぼくのにわのはだけに

たくさんのたからものがある

きせつでかわる たくさんのやさい

おじいちゃんがそだてているやさい

すこしあつい 春の日

「ジャガイモほりをするよ。」

おじいちゃんがぼくに言った

「よし、ぼくの出ばんだ！」

土の中からジャガイモをほる

「青いジャガイモは分けてね。」

前に教えてくれた 大じなルール

ぼくはむちゅうになってほって行く

たくさんのジャガイモがおを出す

まるでたからさがし

土の中からミミズがおを出す

「がんばれー！」

ぼくをおうえんしているみたい

「すこしかわかすよ。」

ほったジャガイモをシートにならべる

大きいもの、小さいもの、細長いもの

いろんな形のジャガイモが

まるでベッドにねているみたい

早くたべたいな

ぼくの頭の中

ジャガイモりょうりがならんでる

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
春風と足音	手子林小学校 六年	柿沼 思李沙
やさしい居場所	さとえ学園小学校 四年	柿沼 詩空
誰かのためのヘアドネーション	羽生南小学校 六年	梶原 愛咲
小さく力強い光	須影小学校 四年	高野 優理奈
わたしの好きな事	羽生南小学校 五年	小林 虹花
五分間の通学路	羽生南小学校 五年	月岡 蒼翔
私の半紙はスケートリンク	手子林小学校 三年	中野 怜
おかえり	羽生東小学校 五年	西野 晴翔
しあわせはこぶミニトマト	羽生東小学校 二年	長谷川 あお大
なつまつり	羽生北小学校 一年	深町 悠希
ワクワクする羽生の音	手子林小学校 五年	福澤 颯人
私の役割	羽生北小学校 五年	古谷 彩結

◎中学生の部

太田玉茗賞

未来への手紙

南中学校 一年

藤倉 日莉

羽生市の青い空に
終戦記念日を前に
私は羽生の図書館へ行った
静かな郷土資料館の一角に
アジア、太平洋戦争の記憶があつた
遠い昔の出来ごとだと思つていた
でも、特攻隊員の遺書を見て、おどろいた
こんな身近な場所に
長谷部寅祐さんという若者がいた
「父様、どうか御身を大切に」
「どうか、笑ってくらして下さい」
国のため、大義のため、と書かれていても
その行間から溢れるのは
ただ故郷に帰りたい、もつと生きてかかった
という、切なくも温かい想いだった

戦地へ向かう、その日の朝を思う

「どうか無事で」と手をふつた

その笑顔の裏にかくされた

胸をしめつけるような、辛い気持ち

それでも彼は

国のために、と恐れずに立ち向かった

その勇やかな目差しを想像するたび

私の心は震える

あの日の遺書は

戦後の平和な羽生の空の下で

今を生きる私に語りかける

この歴史を、この痛みを、

決して忘れてはいけない

そして、次の世代へ繋いでいく

それが私に出来ること

あの日の手紙が、

今の私に、そつと語りかけている

「どうか、この平和を守ってくれ」と

終戦記念日の日、

私は羽生の空を見上げた

この青い空が、

ずっと続いてほしいと願いながら

宮澤章二賞

ありがとうの音色

東中学校 三年

濱野 颯介

昨年の夏

私たちは大きく飛躍し

金賞という輝きを手にした

努力が実を結んだ結果だった

そして迎える最後の夏

仲間が増え、心はひとつに

挑む舞台は、より大きく

課題曲と自由曲、二つの曲

技術を磨き、日々練習を積み重ねた

先生方は、惜しみなく力を注いでくださり

外部の先生も時間を割いて

響きの一つひとつを導いてくださった

先に歩んだ先輩方も

私たちを支え、応援してくださった

そして訪れる本番の朝

事前のくじが告げた演奏順は「一番」

静寂を切り裂き

マーチの軽快なリズムが広がる

続く自由曲は力強く始まり

ホール中を響かせた

結果は銀賞

けれどそこには

まっすぐに素直な私たちの音楽があった

三年間を思い出し

涙があふれた

そして、心の中には感謝があった

仲間とともに築いた時間

先生方に支えられ

先輩方に導かれ

数えきれない人たちに助けられた

最後のコンクールを終えた今

私たちの胸にあるのはただひとつ

すべての人へ届けたい

心からの「ありがとう」

優秀賞

新しい通学路

南中学校 一年

佐藤 郁仁

中学が上がって通学路が変わった
新しい通学路は線路の脇の道を通る

朝

太陽に向かって歩く通学路はキラキラしてい
て

下り電車の車体が太陽の光でキラツと光る
そうすると僕の寝ぼけた頭がシャキツとなる

同じ道でも

帰りは少し違う

日もすっかり傾いて

線路脇の家からこぼれる光が温かい
気持ち沈んでいるときは

なぜかいつもより暗く感じる

疲れて足取りが重かった日

雲の切れ間からオレンジ色の光が伸びた

オレンジ色に染まった景色を見て

なんだか今日はいい日だと思った

新しく通学路になった道

この道は小さい頃からよく通った道

走ってくる電車の運転手に手を振っていた道

時々運転手さんが手を振り返してくれて嬉し
かった

パオンと警笛を鳴らしてくれたときは

それだけで興奮した

今はさすがに手は振らなくなったけれど

時々小さい子が手を振っているのを見て

なんだか懐かしい気持ちになる

同じ道だけど

毎日なにか少し違う

これからの三年間

どんな風景が心に残るだろう

絵の中の私

南中学校 一年

長久保 圭子

絵はもう一人の私だ

その日の気分で色は濁り

その日の想いで色は輝く

五年生で絵画教室に入った

今まで見えていた色、物、世界、全てがひっくり返った

例えばそのペン、青と何色で描けるだろうか

例えば利根川、白と黒で描くならどこが一番

黒くなっているのか

全ての見方が変わった

全ての捉え方が変わった

まるで、生まれ変わったようだった

中学校で美術部に入った

六年生までの絵の経験全てつぎこんだ

それでも、先輩は超えられなかった

悔しい 悔しい 悲しい 悲しい
でも 楽しい

また、私のパレットに色が増えた

今日も私は色を重ねる

日に日に増える新しい色と一緒に

これから増える大きな色と共に

新しい私に出会うために

私は走る

東中学校 二年

蓮見 友里乃

走る 走る ただひたすらに走る。
額に流れる汗もそのままに私は走り続ける。
陸上部に入つて、二年目の夏。
毎日異常なほどの暑さだと言われる。
それでも私は走る。
何のために どこまで いつまで
様々な考えが一瞬頭をよぎるが、私の目に
映っているのはゴールラインだ。
陸上を始めるきつかけとなつたのは、小学
校の頃の陸上記録会だ。
私は学校の代表選手として出場した。
毎日の練習で長距離を走るのはつらいこと
もあつたが、友の声や先生の励ましが私を
支えてくれた。
練習を重ねるごとに、タイムを縮められた
のもうれしかった。
そして迎えた陸上記録会当日。

たくさんの人の応援を背に、私は走った。
息が苦しい 心臓の鼓動が止まらない
精一杯足を動かしても、どうしても追いつ
けない背中。
結果、私は七位だった。
入賞は六位まで。私はあと一步のところ
入賞することができなかった。
悔しかった。涙がこぼれた。
入賞できなかったこと以上に、自己ベスト
を出せなかつたことが悔しかった。
そんな私を悲しみから救ってくれたのもま
た友や先生の声だった。
中学校に入学してすぐ陸上部に入ることを
決意した。
あの時の弱い自分を超えられるように。
陸上部の練習は厳しい。
毎日たくさんの距離を走る。
その積み重ねが私を成長させてくれる。
苦楽を共にし支え合える友がいる。
真剣に教え励ましてくれる先生がいる。
私は今日も走る。ただひたすらに走る。

奨励賞

羽生の四季と剣

南中学校 三年

大谷 遥香

春、利根川の土手に菜の花が咲き、
水辺を渡る風が、頬をやさしくなでていく。
新しい季節の始まりに、藍色の胴着の袖を通
し、竹刀を握ったあの日。

道場の窓から差し込む陽の光が、
埃とともに宙を舞っていた。

夏、青空の下、田んぼの緑がまぶしく、
入道雲が空いっぱい広がる午後。

汗だくの稽古、面の中の熱気、
心を込めて放った「面！」の声が、
静まり返った体育館に響き渡る。

蟬の声といっしょに、自分の声も風に乗って
消えていく。

秋、稲穂が黄金に揺れ、コスモスが咲く道

を、帰り道に一人、竹刀袋を肩に歩いた。
道場の床に落ちた落ち葉を見て、

季節の移ろいに気づく。

親友に勝てなかった日の夕焼けが、
やけに美しく見えたのを覚えている。

冬、宝蔵寺沼に舞い降りる白鷺たち。

澄んだ空気の中、呼吸は白く、足裏は冷たい。
でも、心の奥には、確かな熱があった。

打ち込むたびに、少しずつ強くなる自分がい
て、ふるさとの寒さが、むしろ励ましになっ
ていた。

風とともに育ち、汗とともに学んだ日々。
羽生の空の下、剣と向き合ったあの時間は、
今も心の支えになっている。

夏野菜

東中学校 三年

小澤 うた

私の祖母は野菜やお米を育てている

祖母の作る野菜は絶品だ

みずみずしく甘い

とても暑い日だった

祖母は外に出た

私は暑くないのかなと思った

何をしているのだろうと気になった

見に行くと野菜の手入れをしていた

まぶしい太陽をもともせず

水をあげたり

肥料をあげたり

いらぬい芽を取ったり

野菜と向き合っていた

まるで祖母は野菜達と会話をしているよう

だった

どのくらい水が欲しいか

虫に食われていないか

野菜の気持ちを聞いて育てていた

だから祖母の作る野菜はおいしいのだなと

思った

祖母の家に行くと野菜をわけてくれる

まっかなトマト

みずみずしいキュウリ

大きいナス

どれもおいしい

その野菜を食べると私は笑顔になる

家族みんな笑顔になる

自然と笑顔があふれてくるのだ

とても不思議な野菜だ

今日も祖母は野菜の手入れをしている

大きなツバの帽子が畑の中で見えかくれし

ている

「おばあちゃん」

あふれる笑顔で祖母は言う

「野菜食べるかい」

そんな思いのつまった野菜は私は大好きだ

夏の日差しと獅子舞の祈り

東中学校 一年

小野澤 柊弥

夏の日差しが眩しくて

小さな手で額を覆い

家族とともに砂利道を

ドキドキしながら歩いて向かう

歩けば歩くほど

太鼓の音が響き渡る

空気が変わる

小さな人だかりを抜けると

白い波のマントを身にまとい

大きな角の獅子舞が現れ

目の前で踊り始めた

その姿はとても大きく

迫力があつた

でもどこか優しさを感じた

獅子舞が近づいてきた

怖いよりも嬉しかった

獅子舞の身振りには

「安全に過ごせますように」

そんな思いが込められていた

きれいな音の横笛と太鼓

動きの節々から感じる

昔から引き継がれてきた

上村君の伝統

見とれていた

あつという間に時間が過ぎ

音がだんだん離れていく

胸の高鳴りは

今でも忘れない

あの夏の日

ずっと色褪せない

心に残る思い出の一ページ

送り盆

西中学校 三年

柏瀬 百花

「おかえりなさい」

おばあちゃんが言った

目線の先には

額縁に入ったおじいちゃんがいる

この時期になると

お客さんが増える

いつもは風の音しかしない居間に

話し声が響いて

お線香のにおいが染みつく

今の時期になると

いつそう大きな火が灯る

おじいちゃんにあいさつをする時は

ろうそくに火を灯して

顔が見えるようにしてあげる

私が小学校六年生るときから

変わらない姿 変わらない笑顔

おじいちゃんの前に立って気づく

手を合わせる私の影は

あの日から確実に大きくなっていた

今日はおじいちゃんを送りだす日

次会う時私は高校生だ

受験をのりこえて

一回り大きくなつた姿を見せれるように

安心して帰ってこられるように

もう何度目かの約束

おばあちゃんは今も言っている

お線香の煙は思いを私たちを繋げてくれるらしい

だから私は少し長めのお線香に火を灯して

言った

「また来年」

皆が集う風の公園

南中学校 一年

藤井 倅太

四年前に引っ越してきた僕の家のおそばには

「風の公園」がある

カラフルな遊具や砂場があり

小さい子連れられた家族がたくさん集まる

土日は早い時間から元気な声でにぎわう

木陰のベンチには犬を連れられたおばあさん

配達途中のトラックが停まり

運転手さんがトイレに入る

ここは必要とした人が集まる便利な公園

「風公に集合ね！」

友達と約束し、そこでまた他の友達にも会い

皆で楽しく遊んで過ごす

五時のチャイムが鳴ると皆が一斉に帰る

「バイバイ、また明日ね！」

にぎやかな公園が一気に静まりかえる

ここは楽しい時間で一日を締めくくる公園

僕の住む地域では公園の掃除が順番にあり

父も毎回参加している

暑い日も寒い日も、朝早く公園に集まるのを

僕は家の庭から眺めていた

そんな地域の方がゴミを拾い、草を刈り、

トイレトッパーの補充もしてくれている

僕たちが気持ちよく使えるのは

このような協力あってこそなんだと気づいた

僕が使う公園、僕もきれいにしたいと思ひ

バスケットに行く前に父と参加した

「手伝ってくれてありがとうね」

お礼を言うのは僕の方だ

「いつもきれいにしてくれてありがとうござ

います」

ここに集う皆を代表して言えた気がして

心が晴々した

きれいに刈られた芝生の丘に上がったなら

気持ちいい風が吹き抜けた

ここは確かに「風の公園」だ

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
夏を運ぶ風	東中学校 二年	井上 優衣
ふるさとの手のひら	南中学校 一年	大谷 絢香
おばあちゃんと僕	南中学校 一年	角田 力飛
この音色を届けるために	東中学校 一年	小板橋 ほのか
三田ヶ谷小の廃校と光	東中学校 一年	高瀬 遥斗
迎え盆	東中学校 二年	中田 權斗
心を一つに	西中学校 三年	村田 莉那
ふるさとを照らす光	東中学校 三年	恵 蘭
ふるさとの夕鐘	南中学校 三年	柳沢 理名
仲間とともに、頑張るぞ	南中学校 一年	渡邊 陽輝

第二十一回 小中学生「ふるさとの詩」募集要項

利根川の流に生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

1 募集作品

- ・「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・自作で未発表の作品(過去に書いた作品でも構いません。)
- ・応募作品数は一人1篇

2 応募方法

- ・400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

3 応募資格

- ・市内の小学生・中学生

4 応募締切

- ・令和7年9月4日(木)

5 発表

- ・令和7年11月下旬に通知

6 賞

- ・小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・賞状と盾を贈呈します。

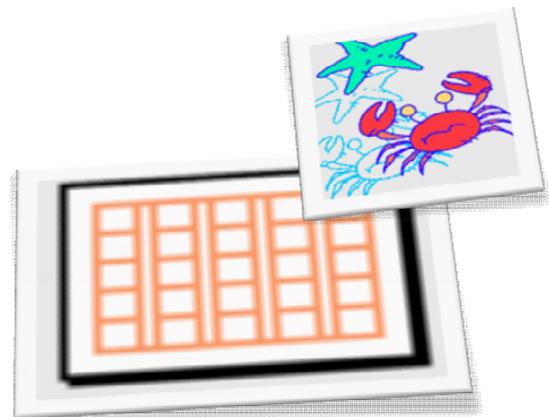
7 その他

- ・応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。
- ・ホームページには、過去の作品も掲載されておりますので、参考としてご覧ください。

8 主催 羽生市

9 応募・問合せ先

羽生市役所秘書広報課 〒348-8601 羽生市東 6-15 Tel.561-1121 (内線 204)



●第二十一回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	2 2 4 篇
中学生の部	4 4 3 篇
応募総数	6 6 7 篇

●選考委員（五十音順）

小 島 敏
鳥 海 一 寿
根 岸 光 子
萩 原 澄 江
水 野 栄 子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 令和 8 年 1 月 2 7 日

